「自由の学風」という幻想

廣田　勇（理学研究科名誉教授）

はじめに

京都大学地球物理学研究百年史の議論のなかで、他大学には見られない特色のひとつとして「京大の自由な学風」が挙げられていた。この小論ではその意味をもう一度問い直し、学問研究における「自由」とは何かを自分の教官在職期間（1974－2001）の経験に照らして批判的に考察してみたい。もとよりこれは極めて大きな問題提起であり、一般論と特論の仕分けは困難であろうが、可能な限り理学部地球物理学教室における研究と教育に特化して話を進めることとする。結論は表題どおり歴史上の幻想を払拭することである。

自由とは何か

まず言葉の原義の解釈から始める。「自由」は後漢書に見られる古い漢語であり、現在の日本語では様々な場合に幅広く使われている。それだけに常に曖昧さが付きまとう。

自己流の解釈法として、研究教育の場に即して「自由」の「反対語」を考えてみよう。

（1） 不自由：研究費が足りないので必要な設備・機器が買えないこと、また旅費が無く国際学会出張が出来ず不自由、と言った意味での「制限」や「障碍」。俗語では「不如意」ともいう。

（2） 束縛、強制：たとえば国家政治レベルで「思想・言論の自由」が侵され抑圧されること。実例は京都大学の「滝川事件」など。我々の自然科学研究に関しては、いわゆるトップダウン方式の大型プロジェクトや産学協同などという胡散臭いスローガンに象徴される研究テーマが優先的に予算配分を受け、研究者個人がやりたい（価値ある）と思う研究に種々の制限が伴うこと。

同じことを英語について言えば、日本語の「自由」の対訳語は Freedom と Liberty である。しかしこの二つはかなり意味が違う。Free とはたとえば入場無料とかTシャツのフリーサイズのように「制限なし、条件不要」の場合に使われることが多く、ときには「勝手気儘」のような無責任の意味に転用されることもある。これに対し Liberty とはもっと厳しい概念である。ニューヨーク港にある「自由の女神」は Statue　of　Liberty であり、その Liberty とはフランス革命で市民たちが「自らの血を流して勝ち取った自由」という意味である。これは「空気や水はタダ（フリー）」といったような安直に手に入る自由とは全く異なっている。

そう考えれば、上記の（1）と（2）における対処法・対抗手段が自ずから明らかになってこよう。研究費の不足もテーマの選択も「自力で」処理すべき問題であり、そのためには研究の場における「信念、力量、実績、責任」という強い裏付けが求められるのである。「好きなようにやらせてくれ」といった安易な自由の履違えは許されない。

学園騒動のもたらしたもの

1970 年ころに全国の大学を襲ったいわゆる学園騒動は幸いにも今や完全に風化している。歴史的に見て唯一その意義が認められるのは、発火点となった青医連の主張、つまり旧来の医学部における封建的（ボス的）運営方法に対する改革であった。ところがその火種は瞬く間に他の場所で「俺たちの自由にさせろ」という無責任な主張に変えられていっ

た。

京大地球物理学教室においても、1970 年代には学生院生のみならず助手クラスの教官の間にさえその空気が蔓延していた。当時この種の議論においてあたかも金科玉条の如くに使われた言葉は「民主的」である。それは教授人事のような重要な教室運営の場で助手までが対等な一票を持つという愚劣きわまりない雰囲気に繋がっていた。そこには安易な権利意識ばかりが幅をきかせ「責任感の自覚」の欠片すらなかった。その背景には当時指導的立場にあったはずの人々に毅然たる態度が欠けていたこともあった。

そもそも「民主主義」という概念は学問の世界とは全く無縁のことがらである。私は常日頃「民主主義が適用されるべき事例は団地のゴミ処理とか中学校の運動会などのように全員が対等に雑務を分担すべき場合である」と言い続けている。学会の運営においても事情は同じであり、必要な仕事は共同分担である。理事等の役員を全会員の投票で決めるというのは、民主主義でも何でもなく、他にそれ以上の方法がないからに過ぎない。

しかしながら、学問研究の場においては、(旧ソ連や毛沢東時代の中国はいざ知らず)「民主的な研究」などあろうはずがない。もし講座内で教授と助教授や助手が研究内容に関し口角泡を飛ばす真剣な議論を行ったとしても、それは民主的でも何でもなく、純粋に研究者としての対等な議論であり、その議論内容の当否は学会レベルでの論文の評価として個人個人が責任を持つべき事柄なのである。

学園騒動の後遺症のなかで救われた気持ちになるのは、当時の「悪しき民主主義」に染まった世代のうち、後年まで職員組合活動などにばかり熱心で研究上見るべき成果を残すことのなかった人々とは別に、ある時期に自覚を取り戻しその後優れた研究成果を挙げた人々が何人かいたことであった。院生当時「学位制度反対」などというビラを配っていたにも拘らず後年は国際学界のリーダーとして認められるほどの立派な成果を挙げた人物もいる。そのような人々にとって学園騒動は「ほろ苦い青春のひとこま」なのであろうが、あえて断言するなら、これもまた学問と民主主義は無関係であることの証明である。

教育と自由

次に、大学院教育の場における自由の意味を考えてみる。

昨今の各大学の研究科には「環境」とか「情報」とかの一見誰でも取り付き易そうな言葉を掲げたものが目立つ。修士課程に進学する学生たちの中には、何となくそのようなキーワードに憧れて入ってくる者がかなりいるのは事実であろう。本来は、教養課程を含む学部の段階で基礎をしっかり学び、その上で自分の将来の志望専門分野を決めて大学院に入るべきものであるが、現実はそう簡単ではない。

そのような修士新入生に対し、指導教官が「君たちのやりたいことを自由にやりなさい」と言ったとしたらどうなるであろうか。おそらく十中八九までは何をやってよいか分からずじまいになろう。「自由」という美名はここで早くも破綻する。

大学院の指導教官の責務は、「学生は先生の背中を見て成長する」の言葉どおり、まず教官自身がその分野で優れた研究成果を示すことは当然であるが、加えて、個々の学生院生の特長（能力、性格）を正しく見抜き、夫々に的確なテーマとそれに見合った勉強方法を指示することである。その段階では、間違っても「自由」などという言葉は口にすべきでない。むしろ、俗な言葉で言えば「最初のうちはとにかく騙されたと思ってやってみろ」というのが本当の親心である。その意味で、「京大地球物理学研究百年史」のなかで川崎一朗氏がご自身の体験に基づいて述べておられることはまさに同感の至りである。東大地球

物理学教室で地震学の浅田敏教授が「将来地震観測をやりたいならまずは理論をしっかり勉強しなさい」と指導したことは鑑とすべき教育方法である。優れた指導者というものは、学生にとって後日「あの先生の指示に従って勉強したことが本当に役に立った」と思わせるのが真の教育である。私自身、修士課程では川崎氏と同じような経験があり、のちに自分が院生を指導する立場になったとき、そのことを強く意識してきたつもりである。

逆に言えば、自由の美名に隠れた「放任主義」を良しとするのは、結局のところ指導教官の責任放棄に他ならない。実際、そのような悪い例が近くに無かったわけではない。

立派に成長してくれた院生の多くは、博士課程卒業の段階では巣立ちを終え自分自身の興味関心に従って独自のアイデアを打ち出してくれる。そのときこそ初めて「自力で研究の自由を勝ち取った」と言えるのである。

「自由の学風」とは何か

そろそろ結論を急ごう。京都大学が「自由の学風」を持っていたことは分野によってはあったのかも知れない。しかし地球物理学に限って言えば、本当にそのような長所があったかどうか、大きな疑問を感じざるを得ない。この「百年史」の正編のなかで国際性と独自性の相克という視点から論じたのと同様に、京都の独自性と言われてきた研究の内容は、ややもすると安易な「本筋を横目で見た勝手気ままなタコツボ型」ではなかったか。

京大地球物理学分野で堂々と自己主張できるような優れた研究成果があったとしたならば、それは「自由」が生み出したものではない。本当の自由とはアプリオリに存在するものでもなければ天下り的に与えられるものでもない。文字通り自ら汗を流した結果の研究実績によって「種々の束縛・制限を自力で打破した自由」が得られたものなのである。そしてこれが一番大切なことであるが、その段階ではもはや自由云々を口にする必要さえも存在しない。「自由の学風」が幻想であると言った真意はそこにこそある。